される側から感じた『評価』

ガバレ農場　江原　広美

長い肩書をお持ちの皆さん方の中で、「これは何だ」という感じで、「ガバレ農場」と書いてありますが、ガバレというのはエチオピアの言葉で農民ということです。私たちが農民としての生活を始めたのは、エチオピアでの経験が非常に大きかったということがあります。

私は1989年から２年間、日本国際ボランティアセンター（JVC）のスタッフとして、エチオピアの農村復興プログラムにスタッフとして参加しました。JVCのエチオピアのプロジェクトは、1985年のアフリカ大干ばつの際に緊急救援として病院を設営する、設立ではなくて設営であり、テントの病院を作ったのです。そこの環境は、食べ物がなくて着の身着のままで子どもを抱えて出てきた人たちに応急的に手当てをするというようなことで始まったわけです。参加した当時の医師や看護婦に話を聞きますと、毎日人がごろごろ死んでいくというのです。来た人たちに対して、自分たちは手当てをするしかないわけです。どうしてその人たちが農村から出てくるのか。毎日毎日、来ては死に来ては死にという中で、死んでいく人をただ見ているしかないという徒労感の中で、彼らは農村の基盤をしっかりしなければ、干ばつが来るたびにこの人たちは死んでいくということで、実際にその場で１年やった医師などは、医療プロジェクト自体がもう嫌だと言っていました。だから、最初に農村復興プログラムを言い出したのは医師です。そこで始まったわけです。要するに、干ばつが来ても飢えない、少しぐらい飢えても死なない村づくりということが最初の目標だったのです。

そういう中で、とりあえず畑でものができなければしかたがありませんし、そのためには水もちゃんとしていなければいけないし、生態系の回復といってもはげ山を再生させるところからやらなければだめではないかと、当時やっていたのが植林、農業技術を伝える人材の育成、農業教室と私たちは呼んでいました。そして母子保健活動の核となる人を育てるためのお母さん学校とか、安全な水を確保するための井戸の確保などを組み合わせたプロジェクトをやっていました。話だけではなく、どんなところでどんなことをやっていたのか、スライドで紹介致します（以下スライド略）。

これはエチオピアで、私がショックを受けた風景です。門平さん、これは何の写真だと思いますか。どこの写真でしょう。どういう風景でしょう。そんなに時間はとれませんので、すみません。参加型というときに、こういうかたちで、参加している人たちが、考えながら、意見を出しながら、問題点を洗い出したり、解決のためのアイデアを考えたりしていきます。皆さんが集まっている中で片方から言うよりは、皆さんにどう思いますか、何を考えますか、どうしましょうというかたちでやるのですが、ちょっと触れてみました。これはエチオピアの畑です。私たちは初めて行ったときに、これはひどい畑だと思ったのです。これはみんながらがらした石です。向こうの農民に聞くとこれはすごくいい畑だと、このあたりで一番いい畑だと言うのです。先程タンザニアの例を見せていただき、きれいな土だったのですが、これがいい畑なのです。なぜかというと、石があるから土壌流出が防げる。雨が降っても土が流れていかない。

そこで、土を流さないために植林をするのですが、これは５年目ぐらいです。本当はいけないのですが、私たちもいけないことは知っていますが、これはユーカリです。在来種ではありません。薪炭材と家の建築材ということで、このようにユーカリを植える地域と、アカシアなどの現地で取った木を植える地域があります。

これはフード・フォー・ワークです。植林とか道の建設などをしたときに、援助物資である麦を日当として使っている。そういう写真です。

これはお母さん学校です。彼女たちはお母さん学校で保健のプライマリー・ヘルスケアを学びます。こういうポスターを作って家庭訪問をして子どもたちのケアについてお母さんたちにお話をしていくということです。

これは村に入って、ドラマ仕立てでどのように伝えるか、今ドラマの練習をしているところです。

これは植林をするための苗木を育てる圃場の写真です。私が気に入らなかったのはここでビニールを使っていたことで、このビニールを何とかできないのかと思いました。エチオピアの山奥でこんなビニールは使えません。これはポットですが、底もなく、ビニールの管なのです。管の中に土を詰めてというかたちでやるのですが、ビニールを使うということが全く気に入りませんでした。これはお母さんたちを対象にした家庭菜園のモデルといいますか、JVCの施設の中でお母さん学校の土地としてやってもらうということです。

土壌流出ですが、雨期の前までは何もなかったところが、大雨期が終わったあとにはこうやってぼそっと抜け落ちてしまいます。向こうの山を見ていただくとわかりますが、裸です。二山ほど向こうに行ったところでは緑が残っているところがあり、そこには前の植生が残っています。そこは何かというと、その辺出身の国会議員がいて、警備兵を雇って村人やヤギなどを中に入れなかったところです。そういう緑が残っている場所があって、私たちにしてみればそのような山に戻すことが１つの目標だったというのはあります。

こういうプロジェクトをやっていたのですが、私が行ったのは始まって３年目のときで、私たちの前任者がいて、彼らがこういうプロジェクトを始めていて、３年目ぐらいで彼らも疲れてきて、ちょうど中間といいますか、今やっていることがいいのかどうか、やり方がいいのかどうかを評価しながら次に進めていこうというときでした。また、イギリスのOXFAMという団体から、種、農機具、医療品などの提供を受けており、そのときOXFAMからの評価チームが時期を同じくして、それはアジスアベバ大学の社会学か何かの先生方でしたが、外部からの評価というかたちで入ったのです。私たちもちょうど自分たちでプロジェクトの評価をしなければいけないということなので、調査に来た先生たちにほかの部分もやってほしいと、農具などだけではなく、私たちのプロジェクト全体をやってほしいという依頼をちゃっかり致しました。

私も入ってから３か月ぐらいはとにかく今のものに手を出さないで、評価のために情報を集めようと活動していたのですが、残念ながら私たちが入って７か月目ぐらいで内戦状態になり、私たちは荷物を全部置いたままそこを逃げ出すしかなかったのです。私自身は違うところのプロジェクトを始めたりして、そこの基礎調査をしたのですが、それは今回お話し致しません。

内戦が終わって、もう一度マーシャ村に入れるようになってから入っていきました。先程言ったフード・フォー・ワーク、労働をしてその対価として小麦を払うというのは、援助に頼ってしまう、農村の依存する体質を作るのではないかということで、例えば日本の農家のおじさんたちが、公共事業で土方仕事をして兼業農家になっていくというコースと同じなのですが、そこを助長していいものかということがありました。援助をいつまでも続けられないということで、私たちは段階的にフード・フォー・ワークをやめていこうという方向にいっていたわけです。そこで内戦が起こって、プロジェクトがすべて一時中断をしてしまったので、再開するときにはこれ以上フード・フォー・ワークを続けないという方向で、プロジェクトを進めていきたいと思ったのです。そのことを村で農民たちと会議を持ったりして、村人たちもそれでいいと、一応合意をしたと私たちは踏んだのです。要するに植林のためのニーズはあるわけですから、フード･フォー･ワークで小麦を配ることは緊急のとき以外はやめようということで合意をしていたと思ったのですが、それが終わったあとで手りゅう弾を事務所に投げ込まれるということがあったのです。事務所の中で不正があるという告発があったりして、結局、コミュニティとかかわることが非常に難しくなり、このマーシャ村も撤退せざるをえなくなりました。今は違う場所でやっています。プロジェクトとしては、水場の方が中心ですが、やはり同じような内容でやっています。

私たちが向こうで感じたことは、村落の調査などをするときには、例えばインタビューをするときに私た

ちは絶対紙を持っていきません。紙を持っていくと、紙に書いていること自体に、おばちゃんたちはみんなわからないので、「何だ、何を書いているのだろう」と緊張してしまって、本当の話を聞けません。だから、私も交えて現地の人たち２～３人とから手で行って、お茶を飲みながら世間話をするようにして、質問をしながらいろいろな話を聞き出して、終わるやいなやぱっと外に出て、ぱーっと書くというようなかたちでなければいけないのです。ペンと紙を持って「はい、これはどうですか」という聞き方をしたときに、本当のところは絶対出てこない。特に、「ヒツジを何頭持っていますか」など生活や財産にかかわるようなことは、言ってくれません。今私は農民をしていて、そんなことを外部から「基礎調査です」などと聞きにこられても、正直に答えたくはないですからね。

そのように、同じレベルでものの見られる人、違うところにいるけれども同じような視点でものを考えられる人が調査の中に入っていかなければ、紙で出てきたものやそこで聞いたものが本当に信頼性があるかどうかは、疑わしいと思っています。調査で数字を挙げることよりも、本当のそこの状況や本音を聞き出さなければ本当の意味でプロジェクトは進んでいかない、改善していけないと思っていましたから、そういうかたちで農民たちとコンタクトを取ることをずっと続けてきたのです。

例えばミーティングをやるといっても、男の人しか出てこないのです。だけど、生活を本当に担っているのは女の人なので、女の人たちの声をどう聞き出すかということをやっていなかければいけなかった。

１つ提言ですが、そういうかたちで最終的なベネフィシャリーの声をいかに吸い上げるか。いかに私たちが聞いていけるかというときに、外部者といっても、例えば農民どうしでわかり合えることはあるわけです。今、雨がほしいときに雨が降らないと私もすごく困って、空をながめながら「ああ、今日も雨が来ない」と思うのですが、そういう気持ち、同じ気持ちを持てる人が調査の中に加わることです。例えばかんがいにしても農業のプロジェクトにしても何にしても、そういう気持ちで同じ視点から見られる人が調査の中に入っているかどうかというのは、大きなファクターになると思います。

JVCなどで例えば、昨年、朝市をやっている日本のお母さんたちと、タイの東北部で朝市を始めた向こうのお母さんたちとの交流をやって、そこでワークショップをやってみたそうです。そうすると、日本とタイでは全く違う境遇でありながら、開発にさらされて農村が疲弊しているという同じようなバックグランドを抱えた、違う国の農家のお母さんたちがそこでつきあうことによって、彼女たちが本当に持っている問題点がいろいろな角度から浮かび上がってくる。NGOとしてはそういう意味でのいろいろな経験があります。先程も言いましたが、開発教育というようなかたちで私たちが考えていた手法というものが、評価に大きな意味を持ってくるということ、パーティシペーションという方法が大きな力を持ってくるということを、昨日、今日の皆さんの発表を聞きながら思っていました。皆さんが考えていらっしゃる評価の中に、そういう視点をぜひともこれから入れていっていただきたいと思います。以上です。